

## 令和六年度文部科学大臣賞審査概要

本年度の文部科学大臣賞の選考は、令和五年四月一日から同六年三月三十一日に至る一年間に刊行された連歌・俳諧・俳句に関わる著作が対象となる。その中から候補たり得る著作八点を厳選して各委員に確認し、選考委員七名によるそれらの綿密な査読、その結果を持ち寄っての慎重な審議によって選考が行われた。その結果、尾崎千佳著『西山宗因の研究』（令和六年三月二十八日、八木書店刊）を最優秀著作として推薦することに決定した。以下、著作の概要、各委員による推薦文と当日の選考会議をもとにした審査概要を記す。

本書は三部構成からなる。第一部は「俳諧師宗因の虚と実」として、第一章に「晩年の宗因―宗因伝記研究をめぐる覚書―」、第二章に「宗因顕彰とその時代」、第三章に「宗因における出家とその意味」、第四章に「宗因と伊勢 続貉」、第五章に「連歌師宗因の俳諧点業」と論を展開する。定説となっていた晩年の宗因像が、一俳人の言を無批判に踏襲した末の虚構であったという指摘は強烈なインパクトを放つ論考。従来の宗因像を形作っていた鍵となる要素を次々に取り上げ、宗因像の虚と実を描き出して鮮やかである。第二部は「連歌師宗因の実と虚」として、第一章に「『肥後道記』の典拠と主題」、第二章に「陸奥行脚とその紀行」、第三章に「大坂城代青山宗俊との交渉」、第四章に「『明石山庄記』と『明石浦人丸社千句』」、第五章に「主従の連歌から職業としての連歌へ―近世武家社会における連歌の情理―」と論を展開する。牢人から職業連歌師に転じた宗因の実像を近世初期武家社会のなかに位置づけ、宗因の紀行文の分析などから創作の主題と方法を明らかにした論考。宗因と大名との交渉の実態を解明し、近世初期の武家社会における連歌の機能や、中世とは異なる職業連歌師の実態を鋭く描き出している。第三部は「西山宗因年譜考証」で、『西山宗因全集』第五卷所収「西山宗因年譜」を基盤として、宗因の全事績を、近世初期の文化・政治・社会

の状況と関わらせつつ、具体的に考証している。2段組396頁におよぶ年譜考証には、従来の研究史を刷新する新知見を豊富に盛り込み、幅広い社会的・地域的階層との交流の様相を精緻に記したもので、宗因伝記研究の金字塔といえよう。

本書は『西山宗因全集』に編者として関わった著者が、その後も徹底した資料の収集とその客観的分析に努め、従来の宗因像の誤りを正し、宗因の実像を動態的に浮かび上がらせた論考。宗因の人生の行動と作品が、いかなる文化的・社会的状況のもとで生成されたのか、その変化の意味を徹底して探求している。近世前期の武家社会における牢人の実証研究として歴史研究にも寄与するものであろう。牢人宗因、連歌師宗因、俳諧師宗因の再構築を成し遂げた秀逸の書である。

文部科学大臣賞選考委員会

委員長 宇城 由文